

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 11 日現在

機関番号：12401

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2013～2017

課題番号：25285145

研究課題名(和文)《ハンセン病問題の社会学》の集大成にむけて 語りの記録化と多事例対比解読法

研究課題名(英文) Towards a total comprehension of the sociology of Hansen's disease issue:
Recording of life-stories and the comparative deciphering of many cases

研究代表者

福岡 安則 (Fukuoka, Yasunori)

埼玉大学・人文社会科学部研究科・名誉教授

研究者番号：80149244

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 11,900,000円

研究成果の概要(和文)：私たちは、ハンセン病回復者たち、そしてその家族の人たちからの聞き取り調査を精力的に実施してきた。その研究成果として、黒坂愛衣『ハンセン病家族たちの物語』(世織書房、2015)、福岡安則『「こんなことで終わっちゃあ、死んでも死にきれん」 孤絶された生ノハンセン病家族鳥取訴訟』(世織書房、2018)、Ai KUROSAKA, Fighting Prejudice in Japan: The Families of Leprosy Patients Speak Out, Melbourne: Trans Pacific Press, 2018 (forthcoming) を上梓した。

研究成果の概要(英文)：We have conducted field-work on the issues of Hansen's disease. We did many life-story interviews from the persons affected with Hansen's disease and their family members. As research results we have published several books: Ai KUROSAKA, Life Stories of the Family Members of the Persons Affected with Hansen's Disease (Seori-Shobo, 2015, in Japanese), Yasunori FUKUOKA, I Can't Die and Leave Things This Way: An Isolated Life and Lawsuit at Tottori by a Family Member of a Person Affected with Hansen's Disease (Seori-Shobo, 2018, in Japanese), and Ai KUROSAKA, Fighting Prejudice in Japan: The Families of Leprosy Patients Speak Out (Melbourne: Trans Pacific Press, 2018).

研究分野：社会学

キーワード：ハンセン病問題 らい予防法 隔離政策 無癩県運動 聞き取り ライフストーリー

1. 研究開始当初の背景

研究代表者の福岡安則は 2003 年から、分担研究者の黒坂愛衣も 2004 年から、ハンセン病問題の社会学的研究に携わってきた。厚生省の第三者機関として設置された「ハンセン病問題に関する検証会議」の「検討会委員」に福岡が委嘱され、黒坂も調査補助者としてかかわったことがきっかけであった。検証会議が『最終報告書』を 2005 年 3 月に公表して役割を終えたとして解散したのちも、わたしたちはハンセン病回復者たちとその家族たち、さらには、ハンセン病療養所の医療従事者や元職員などの関係者からの、ライフストーリーの聞き取りを精力的に続けてきた。2013 年度に、あらたに「《ハンセン病問題の社会学》の集大成にむけて——語りの記録化と多事例対比解読法」と銘打って、次の段階の研究をスタートさせた時点では、すでに約 280 名からの聞き取りの蓄積をもち、多くの聞き取り事例を紀要等に公表するにとどまらず、刊行図書として、『栗生楽泉園入所者証言集』全 3 巻（創土社、2009 年）や『生き抜いて サイパン玉砕戦とハンセン病』（創土社、2011 年）を上梓してきた。

それでもなおまだ不十分だと、わたしたちは判断せざるをえなかった。ハンセン病回復者たちの高齢化が進み、次々と鬼籍に入っていく。いま、当事者からの徹底した聞き取り調査をしておかなければ、わが国のハンセン病問題とは何ぞやということを解明しきることはできないと、痛切に思われた。

2. 研究の目的

ハンセン病に対する日本政府の《強制隔離政策》の犠牲者たち——ハンセン病療養所の「入所者」「退所者」さらには「非入所者」——は、現在、高齢化とあいつぐ死亡による減少の中にいる。彼ら／彼女ら、およびその「家族」たち、あるいは彼ら／彼女らの生に伴走してきた人びと——療養所の元職員、元看護婦、医師あるいは国賠訴訟の弁護士——からの《証言》を、ライフストーリーの聞き取りによって記録すること。しかも、個々バラバラの聞き取りではなく、療養所を単位とした《集合的な聞き取りの記録》を残すこと。さらには、それらの聞き取りデータを相互につきあわせる「多事例対比解読法」により、《ハンセン病問題の社会学》と言いうるだけの問題の全体構造の分析を果たすことを、本研究の目的として掲げた。

3. 研究の方法

わたしたちの研究方法は、揺らぐことなく、一貫している。社会的マイノリティ当事者からのライフストーリーの聞き取りを蓄積し、一つひとつの「語り」を丁寧に再現することから始め、問題の分析段階では、それらの語りを相互に突き合わせることをとおして、そ

こから読み取れるものを論理化、概念化していくという手法である。

4. 研究成果

2003 年からの調査研究の積み重ねの上に、2017 年度末時点では、当事者・関係者からの聞き取りは、日本国内のみならず、韓国、台湾も含めて、トータルで 450 人を超えた。そのような地道な調査活動を踏まえて、この 5 年の間に、多くの聞き取り事例を記録として残せただけでなく、何冊もの単行図書のかたちで研究成果を世に出すことができた。

黒坂愛衣の『ハンセン病家族たちの物語』（世織書房、2015 年）は、ハンセン病に罹った人の家族の立場にある人たちのライフストーリー聞き取り、12 の人生物語をまとめた本であるが、この本の出版は、ハンセン病家族たち自身をエンパワーすることになり、また、西日本ハンセン病弁護士共同代表の徳田靖之弁護士をして、“家族の被害はわかっているつもりだったが、本当にはわかっていた。すまなかった”と「れんげ草の会（ハンセン病遺族・家族の会）」の集まりで当事者に謝罪する一場面もあり、2016 年 2 月、3 月の総勢 568 人の原告による「ハンセン病家族集団訴訟」のきっかけの一つともなった。そして、『朝日新聞』2016.4.20 の「ひと」欄に「ハンセン病回復者や家族らに耳を傾ける東北学院大准教授 黒坂愛衣さん（38）」として取り上げられるなど、マスコミの注目も集めた。さらに、2017 年 5 月 20 日、岡山市内で開催された「第 13 回ハンセン病市民学会」において「第 1 回神美知宏・笹雄二記念人権賞」を授与された。加えて、オーストラリアのラトロープ大学名誉教授で Trans Pacific Press の Executive Director である杉本良夫先生の目にとまり、その英語版が *Fighting Prejudice in Japan: The Families of Hansen's Disease Patients Speak Out*, Melbourne: Trans Pacific Press として出版の運びとなり、初校ゲラが出てきたところである。わたしたちのこれまでの韓国、台湾の現地調査や、国際フォーラム参加の経験からしても、世界各地でハンセン病患者・回復者の家族の人たちも、いまなお社会的な偏見差別の対象とされており、日本の経験が国際的に共有されることには、大きな意義があると思われる。

長泥記録誌編集委員会編『もどれない故郷ながどろ——飯館村帰還困難区域の記憶』（芙蓉書房出版、2016 年）は、東京電力福島第一原子力発電所の事故により故郷を追われた福島県飯館村長泥行政区の人たちからの聞き取りをまとめた本である。《故郷喪失と他郷暮らし》という問題構成においてハンセン病問題と通底するところがあるということで、地元委員 7 名（区長経験者など）と外部委員 10 名（研究者、新聞記者、写真家など）からなる編集委員会に入れてもらったのだが、後から参加したわたしたち社会学グループ（福岡、黒坂、佐藤忍）が、全体の半

分におよぶ語りの聞き取り、音声おこし、原稿整理をこなした。本書は、東日本大震災発生からまる5年目の日、『朝日新聞』2016.3.11の「天声人語」全文を使って紹介された。また、2017年7月26日には「第40回福島民報出版文化賞正賞」を受賞した。原発事故に受苦する当事者の思いに少しは応えることができたのではないかと思う。

福岡安則の『質的研究法』(弘文堂、2017年)は、いささか変則的なつくりの本である。第I部「個人的ドキュメントの活用」は、G. W. Allport の *The Use of Personal Document in Psychological Science* (1942) の翻訳、第II部「質的調査の醍醐味」は書き下ろしである。このアメリカの社会心理学者、オルポートの古典の翻訳は、福岡が東京大学の学部生の時代に『個人的記録の利用法』(培風館、1970年)として刊行していたものであるが、このたび、福岡の恩師の見田宗介先生の勧めにより、弘文堂からの再版となったが、そのさい、編集者から改訳と書き下ろしの論文を添えることが求められたことで実現したものである。おかげで、福岡が40数年にわたり社会学的フィールドワーカーとして実践してきた経験を、現在取り組んでいるハンセン病問題調査も含めて、若い世代の研究者たちに伝え残すものとして書きとめることができたと自負している。

福岡安則の『「こんなことで終わっちゃあ、死んでも死にきれん」——孤絶された生／ハンセン病家族鳥取訴訟』(世織書房、2018年)は、ハンセン病を発症しながら、生涯ハンセン病療養所に入所することのなかった女性を母親にもつ一人の男性から、2006年に聞き取りをしていたところ、2010年に彼が鳥取地裁にハンセン病元患者の遺族として・家族として、国と鳥取県を相手どって訴訟を起こすところとなり、2015年9月、一審敗訴。しかるに、その判決内容があまりにハンセン病問題に無知なものであったので、福岡は控訴審段階で広島高裁松江支部に「意見書」を提出。さらには、2017年7月26日、専門家証人として法廷で証言することとなった。この「聞き取り」「意見書」「証人尋問」を一書に編んだのが本書である。まだ出版されたばかりで、メディアで書評に取り上げられるのはこれからだが、贈呈した東大名誉教授で政治学者の石田雄先生からは、「差別の構造の具体的なあらわれ(あるいは現われない存在)は差別に加担する多数派には容易に意識されないという問題がみごとに分析され、その克服の方向も示された点、また具体性と体系性が表裏をなして、みごとな成果と感服しました」とのお褒めの言葉を頂戴している。

このほかに、研究成果として特記しておきたいのは、わたしたちのハンセン病問題の研究が、海外にも知られるところとなり、2016年5月には、韓国国立ソロクト病院の百周年記念の国際シンポジウムに福岡がゲストスピーカーとして招かれ、さらには、韓国の当

事者団体「韓国ハンセン総連合会」主催で同年11月にソウルで開催された「ハンセン病問題世界フォーラム」に福岡と黒坂がゲストスピーカーとして招かれる栄誉を与えられた。このような国際会議への参加によって、世界各地の当事者、支援者、研究者と知己になることができたことは、今後、わたしたちがこの問題の研究をより国際的な広がりにおいて実施していくうえでの大きな基盤が作られたと言えよう。

ただし、5年前に今回の研究計画を立てた時点からは、思惑がはずれたこともある。それは、「療養所を単位とした《集合的な聞き取りの記録》を残すこと」が実現困難になったことである。かつては、『沖縄県ハンセン病証言集 沖縄愛楽園編』『同 宮古南静園編』『同 資料編』(2007年)の刊行に際しては、その調査・編集・出版の費用として沖縄県が2,000万円の助成をしたと仄聞していたし、わたしたちが編纂した『栗生楽園入所者証言集』全3巻(2009年)の出版にあたっては、群馬県から500万円の助成を受けることができていた。いわば、ハンセン病療養所入所者自治会とタイアップすることで地方公共団体からの助成金をアテにしていたのだが、もはや行政にそのような財政的ゆとりがあるわけでないという事態に立ち至っている。それゆえ、ハンセン病問題に関する《集合的な語りの記録化》の課題達成には、今後、別の方途を探らざるをえなくなっている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計42件)

(学術雑誌)

- 1 福岡安則・黒坂愛衣, 「出征中の中国大陸で発症して——ハンセン病療養所『星塚敬愛園』聞き取り」, 埼玉大学大学院文化科学研究科博士後期課程紀要『日本アジア研究』第11号, 221-248頁(2014年)(査読無)
- 2 福岡安則・黒坂愛衣, 「最後の徴兵で沖縄戦に駆り出されて——ハンセン病療養所『星塚敬愛園』聞き取り」, 『日本アジア研究』第11号, 249-275頁(2014年)(査読無)
- 3 福岡安則・黒坂愛衣, 「退所者どうして結婚したけれど……——ハンセン病療養所退所者女性からの聞き取り」, 『日本アジア研究』第11号, 277-293頁(2014年)(査読無)
- 4 黒坂愛衣, 「ソロクトと定着村——韓国・ハンセン病問題訪問記」, 日本解放社会学会誌『解放社会学研究』第27号, 77-95頁(2014年)(査読有)

- 5 福岡安則・黒坂愛衣, 「『1 日おきに薬を取りに来い』では勤めが续かず——ハンセン病療養所『菊池恵楓園』聞き取り」, 『日本アジア研究』第 12 号, 107-125 頁 (2015 年) (査読無)
- 6 福岡安則・黒坂愛衣, 「初めて帰省したのは母の死の直前——ハンセン病療養所『菊池恵楓園』聞き取り」, 『日本アジア研究』第 12 号, 127-146 頁 (2015 年) (査読無)
- 7 福岡安則・黒坂愛衣, 「違憲国賠訴訟を闘いぬいて——あるハンセン病回復者聞き取り」, 『日本アジア研究』第 12 号, 147-186 頁 (2015 年) (査読無)
- 8 FUKUOKA Yasunori, “Historical Overview of the Study of Discriminated Minorities in Japan,” *The Liberation of Humankind: A Sociological Review*, Vol. 28, 2014, 122-133. (2015 年) (査読無)
- 9 福岡安則・菊池結, 「非入所のような, そうでないような——あるハンセン病回復者のライフストーリー」, 埼玉大学大学院人文社会科学部研究科博士後期課程 (学際系) 紀要『日本アジア研究』第 13 号, 89-103 頁 (2016 年) (査読無)
- 10 福岡安則・黒坂愛衣, 「故郷は屋久島, 終の棲家は敬愛園——ハンセン病療養所『星塚敬愛園』聞き取り」, 『日本アジア研究』第 13 号, 105-135 頁 (2016 年) (査読無)
- 11 福岡安則・黒坂愛衣, 「革新の旗を掲げ続けて——ハンセン病療養所『菊池恵楓園』聞き取り」, 『日本アジア研究』第 13 号, 137-168 頁 (2016 年) (査読無)
- 12 黒坂愛衣, 「故郷を追われて——福島調査フィールドノート」, 『震災学』vol.8, 118-123 頁 (2016 年) (査読無)
- 13 福岡安則, 「『怒りの語り』と『感謝の語り』——ハンセン病回復者の聞き取りから」, 『病院・地域精神医学』第 59 巻第 1 号, 24-27 頁 (2016 年) (査読無)
- 14 福岡安則, 「ハンセン病非入所者家族被害論——広島高裁松江支部提出『意見書』」, 『日本アジア研究』第 14 号, 27-115 頁 (2017 年) (査読無)
- 15 福岡安則, 「日本の家族集団訴訟, 韓国の定着村のこれから——ハンセン病問題の現局面」, 『解放社会学研究』30 号, 45-60 頁 (2017 年) (査読無)
- 16 福岡安則, 「裁判抜きの『重監房』——『ハンセン病と差別』覚書 (その 1)」, 『日本アジア研究』第 15 号, 47-66 頁 (2018 年) (査読無)
- 17 福岡安則・黒坂愛衣, 「篤信の仏教徒が国賠訴訟の先頭に立つ——ハンセン病療養所『星塚敬愛園』聞き取り」, 『日本アジア研究』第 15 号, 67-98 頁 (2018 年) (査読無)
- 18 福岡安則, 「リプライ ハンセン病問題で専門家証人として法廷に立つ」, 『解放社会学研究』31 号, 131-136 頁 (2018 年) (査読無)
- (学術雑誌以外)
- 19 黒坂愛衣, 「敬愛園での聞き取りを重ねて」, 星塚敬愛園入所者自治会機関誌『始良野』通巻 330 号, 12-15 頁 (2013 年) (査読無)
- 20 福岡安則, 「差別」, 社会調査協会編『社会調査事典』386-387 頁 (2014 年) (査読無)
- 21 福岡安則, 「最期まで隔離政策と闘い続けて——『死ぬふりだけでやめとけや 研雄二詩文集』」, 『教育』No.825, 116-117 頁 (2014 年) (査読無)
- 22 福岡安則, 「神さん・研さんの遺志を引き継ぐべく——現地実行委員会事務局長を引き受けて」, 『ハンセン病市民学会ニュース』第 18 号, 3 頁 (2015 年) (査読無)
- 23 福岡安則, 「やってよかった『第 11 回ハンセン病市民学会』 / 東アジアの国際連帯へ」, 多磨全生園自治会多磨編集委員会『多磨』第 96 巻第 7 号, 4-5 頁 (2015 年) (査読無)
- 24 福岡安則, 「ハンセン病『特別法廷』問題とは何だったのか——歴史の変わり目に被差別者の解放を押し戻そうとする権力者たち」, 『部落解放』729 号, 82-90 頁 (2016 年) (査読無)
- 25 福岡安則, 「なぜ差別や人権の研究をするのか——多事例を対比し解説する、質的調査の方法と倫理」, 『図書新聞』3293 号, 1-2 面 (2017 年)
- 26 福岡安則, 「会うたびに印象が更新する並里先生」, おうえんポリクリニック開設 13 年記念誌『おうえんポリクリニック』18-22 頁 (2018 年) (査読無)
- (韓国の当事者団体の機関誌)
- 27 구로사카 아이 (黒坂愛衣), 「한국의 한센인과 만나다! (韓国のハンセン人に出

- 会う) 네번째 이야기 (第4回)」, 사단법인 한빛복지협회 (社団法人ハンピツ福祉協会) 『한빛 (ハンピツ)』 58号, 42-43頁 (2013年) (査読無)
- 28 구로사카 아이 (黒坂愛衣), 「한국의 한센인과 만나다! (韓国のハンセン人に出会う) 다섯번째 이야기 (第5回)」, 『한빛 (ハンピツ)』 59号, 38-39頁 (2013年) (査読無)
- 29 구로사카 아이 (黒坂愛衣), 「한국의 한센인과 만나다! (韓国のハンセン人に出会う) 여섯번째 이야기 (第6回)」, 『한빛 (ハンピツ)』 60号, 41-43頁 (2013年) (査読無)
- 30 구로사카 아이 (黒坂愛衣) · 김향월 (金香月), 「한국 정착마을 방문기 (韓国の定着村訪問記) 첫 번째 이야기 (第1回)」, 사단법인 한국한센총연합회 (社団法人 韓国ハンセン総連合会) 『한센 (ハンセン)』 66号, 34-37頁 (2014年) (査読無)
- 31 구로사카 아이 (黒坂愛衣) · 김향월 (金香月), 「한국 정착마을 방문기 (韓国の定着村訪問記) 두 번째 이야기 (第2回)」, 『한센 (ハンセン)』 67号, 32-35頁 (2014年) (査読無)
- 32 구로사카 아이 (黒坂愛衣) · 김향월 (金香月), 「한국 정착마을 방문기 (韓国の定着村訪問記) 세 번째 이야기 (第3回)」, 『한센 (ハンセン)』 68号, 35-38頁 (2015年) (査読無)
- 33 구로사카 아이 (黒坂愛衣) · 김향월 (金香月), 「한국 정착마을 방문기 (韓国の定着村訪問記) 네 번째 이야기 (第4回)」, 『한센 (ハンセン)』 69号, 28-31頁 (2015年) (査読無)
- 34 구로사카 아이 (黒坂愛衣) · 김향월 (金香月), 「한국 정착마을 방문기 (韓国の定着村訪問記) 다섯 번째 이야기 (第5回)」, 『한센 (ハンセン)』 71号, 34-36頁 (2015年) (査読無)
- 35 구로사카 아이 (黒坂愛衣) · 김향월 (金香月), 「한국 정착마을 방문기 (韓国の定着村訪問記) 여섯 번째 이야기 (第6回)」, 『한센 (ハンセン)』 73号, 20-23頁 (2015年) (査読無)
- 36 후쿠오카 야스노리 (福岡安則), 「한센병 문제 최후의 과제(1) (ハンセン病問題最後の課題(1)) —— 일본의 가족 집단 소송 (日本の家族集団訴訟)」, 『한센 (ハンセン)』 78号, 16-18頁 (2016年) (査読無)
- 37 후쿠오카 야스노리 (福岡安則), 「한센병 문제 최후의 과제(2) (ハンセン病問題最後の課題(2)) —— 한일간의 상황 차이 (日本と韓国の状況の違い)」, 『한센 (ハンセン)』 79号, 32-34頁 (2016年) (査読無)
- 38 후쿠오카 야스노리 (福岡安則), 「한센병 문제 최후의 과제(3) (ハンセン病問題最後の課題(3)) —— 앞으로의 한국 정착마을에 대해 (韓国の定着村のこれから)」, 『한센 (ハンセン)』 80号, 16-18頁 (2017年) (査読無)
- 39 후쿠오카 야스노리 (福岡安則), 「한센병 문제 최후의 과제(4) (ハンセン病問題最後の課題(4)) —— 한국의 사례에서 일본이 배울 점 (韓国の取組みから日本が学ぶこと)」, 『한센 (ハンセン)』 81号, 16-19頁 (2017年) (査読無)
- 40 후쿠오카 야스노리 (福岡安則) · 김향월 (金香月), 「경상북도 칠곡마을 방문기 (慶尙北道チルゴク村訪問記) —— 한국 한센병 문제 조사 세번째 여정 (전반) (韓国ハンセン病問題調査3度目の旅 (前半))」, 『한센 (ハンセン)』 84号, 30-34頁 (2017年) (査読無)
- 41 후쿠오카 야스노리 (福岡安則) · 김향월 (金香月), 「안동성좌원 방문기 (安東星座園訪問記) —— 한국 한센병 문제 조사 세번째 여정 (후반) (韓国ハンセン病問題調査3度目の旅 (後半))」, 『한센 (ハンセン)』 85号, 32-35頁 (2017年) (査読無)
- 42 후쿠오카 야스노리 (福岡安則) · 김향월 (金香月), 「한국 정착마을 방문기, 도시화 물결이 밀려든 수도권 정착마을 (韓国定着村訪問記, 都市化の波に向き合った首都圏の定着村) —— 염광마을, 성라자로마을 (塩光村、聖ラザロ村)」, 『한센 (ハンセン)』 87号, 18-19頁 (2018年) (査読無)
- [学会発表] (計 16件)
- 1 福岡安則, 「ハンセン病療養所退所者が子どもを産むということ」, 第29回日本解放社会学会大会 (2013年, 放送大学千葉学習センター)
- 2 福岡安則, 「聞き取りにおける『セピア色の記憶』」, 第30回日本解放社会学会大会 (2014年, 関西学院大学)
- 3 黒坂愛衣, 「2013年夏, 韓国ハンセン病問

- 題調査報告」, 第 30 回日本解放社会学会大会 (2014 年, 関西学院大学)
- 4 福岡安則, 「『A ではなく B も』 対『A だけでなく B も』 ——青山陽子『病いの共同体』 批判」, 第 31 回日本解放社会学会大会 (2015 年, 専修大学生田キャンパス)
 - 5 黒坂愛衣, 「偽りの自己の語り——ハンセン病問題聞き取りから」, 第 31 回日本解放社会学会大会 (2015 年, 専修大学サテライトキャンパス)
 - 6 福岡安則, 「非入所のような, そうでないような——あるハンセン病回復者のライフストーリー」, 第 88 回日本社会学会大会 (2015 年, 早稲田大学戸山キャンパス)
 - 7 福岡安則, 「『怒りの語り』と『感謝の語り』——ハンセン病回復者の聞き取りから」, 第 58 回日本病院・地域精神医学会総会 (2015 年, パルテノン多摩)
 - 8 福岡安則, 「語りの記録がハンセン弁護団を動かす——ハンセン病家族集団訴訟の経緯」, 第 32 回日本解放社会学会大会 (2016 年, 東北学院大学土樋キャンパス)
 - 9 黒坂愛衣, 「語りにみる『故郷喪失と他郷暮らし』——飯舘村長泥行政区住民の聞き取りから」, 第 32 回日本解放社会学会大会 (2016 年, 東北学院大学土樋キャンパス)
 - 10 福岡安則, 「アサイラムをアジールとして生きる——あるハンセン病療養所入所者からの聞き取り」, 第 89 回日本社会学会大会 (2016 年, 九州大学伊都キャンパス)
 - 11 黒坂愛衣, 「“引き裂かれる” 被害、“語れない” 被害——〈ハンセン病家族〉聞き取り調査から」, 第 89 回日本社会学会大会 (2016 年, 九州大学伊都キャンパス)
 - 12 Yasunori FUKUOKA, “Final Task for Leprosy Issue: Class Action Suit by Japanese Families and Future of Korean Settlements,” Sorokdo National Hospital 100th Anniversary International Conference, Sorok Island, 16 May, 2016
 - 13 Yasunori FUKUOKA, “The Meaning of Listening Their Voices: The Narratives as Intangible Cultural Heritage,” 2016 World Forum on Hansen’s Disease, Seoul, 1 November, 2016
 - 13 Ai KUROSAKA, “The Suffering of the Family Members of Those Affected by Hansen’s Disease in Japan,” 2016 World Forum on Hansen’s Disease, Seoul, 1 November, 2016
 - 14 福岡安則, 「何が失われたのか? ——『帰還困難区域』飯舘村長泥住民の聞き取りから」, 第 90 回日本社会学会大会 (2017 年, 東京大学本郷キャンパス)
 - 15 黒坂愛衣, 「“被害(者)”の再構成——ハンセン病『家族』の国賠訴訟から」, 第 90 回日本社会学会大会 (2017 年, 東京大学本郷キャンパス)
 - 16 福岡安則, 「“奇跡の命” ——ハンセン病療養所における優生政策をめぐる父の語り・娘の語り」, 第 33 回日本解放社会学会大会 (2017 年, 東洋大学白山キャンパス)
- [図書] (計 6 件)
- 1 黒坂愛衣, 『ハンセン病家族たちの物語』世織書房, 434 頁 (2015 年)
 - 2 福岡安則, 「ある日系二世聞き取り——ハワイにて」, 山崎敬一ほか編『日本人と日系人の物語——会話分析・ナラティブ・語られた歴史』世織書房, 124-144 頁 (2016 年)
 - 3 長泥記録誌編集委員会編 (山中知彦・福岡安則・黒坂愛衣ほか 7 名の研究者, 新聞記者, 写真家などからなる外部委員+7 名の地元委員), 『もどれない故郷ながどろ——飯舘村帰還困難区域の記憶』芙蓉書房出版, 389 頁 (2016 年)
 - 4 G・W・オルポート著／福岡安則訳・著, 『質的研究法』弘文堂, 431 頁 (2017 年) (第 I 部「個人的ドキュメントの活用」は訳, 第 II 部「質的調査の醍醐味」は書き下ろし)
 - 5 福岡安則, 『「こんなことで終わっちゃあ、死んでも死にきれん」——孤絶された生／ハンセン病家族鳥取訴訟』世織書房, 312 頁 (2018 年)
 - 6 Ai KUROSAKA, *Fighting Prejudice in Japan: The Families of Hansen’s Disease Patients Speak Out*, Melbourne: Trans Pacific Press (forthcoming)
6. 研究組織
- (1) 研究代表者
福岡 安則 (FUKUOKA, Yasunori)
埼玉大学・人文社会科学部・名誉教授
研究者番号: 80149244
 - (2) 研究分担者
黒坂 愛衣 (KUROSAKA, Ai)
東北学院大学・経済学部・准教授
研究者番号: 50738119